

2019年度 第1回 講演会 記録

日 時	2019 年 4 月 13 日 (土)		
会 場	此花会館 梅香殿		
講 師	京都大学名誉教授 舞根森里海研究所長 田中 克 先生		
演 題	最終年度自然学講座のねらいー確かな未来の原点ー		
備 考	出席者 194 名 (会員 191 名+聴講 3 名)	記録	飯田正恒

第一部：2019 年度地球環境自然学講座 開講式

本日は 2019 年度第 1 回目の講演会であるので、第 1 部として講演に先立ち開講式を行った。2019 年度自然学講座は環境省近畿地方環境事務所の後援をいただいている関係から、近畿地方環境事務所長 河本晃利様にご来席ならびに挨拶をいただいた。シニア自然大学校を代表して金戸千鶴子氏、コーディネーター田中克先生、河本所長の挨拶要旨はつぎのとおり。

金戸千鶴子 副代表理事

田中先生からの 4 年間のご指導と 2019 年度並々ならぬ素晴らしいカリキュラムをつくっていただいたことに深く感謝し、今後シニア自然大学校が持続的により自立した活動ができる力を備える努力を行い、先生の負託に応えたい。

田中 克 先生

現代の世はお金持ちになったけれども心の豊かさを失い、心が荒地のようにになっている現実のなかで、どうすれば確かな未来につなげることが出来るかを皆さんと共に考えていきたい。また縁の下の力持ちの存在はこの会を支えるうえで大切な存在であり、このことにも傾注したい。



河本晃利近畿地方環境事務所長

環境保護活動は昔は行政が行うものとの認識が一般的であったが、現在では市民活動との協働がますます重要になってきた。自然学講座は自然科学の世界だけにとどまらず、幅広い分野での活動を計画されており、今後も多くの経験を積み環境を見る眼を磨いてほしい。



第二部：講演 田中 克 先生

(1) 2019 年度地球環境自然学講座 18 名の講師紹介

第 2 回山田和芳先生から第 19 回中井徳太郎先生まで 18 名の講師の略歴、仕事の内容などを紹介された。会員にとってこれからのそれぞれの講演にたいして期待が膨らむ説明であった。

(2) なぜ、前面から一歩身を引くのか？

田中先生はかねてからコーディネーターを 2019 年でもって退く旨を公表されているが、その理由について改めて説明していただいた。(別紙「地球環境自然学講座の今後について」参照)

- ① 講座のより自立的な存在への成長をしていくために、聴く講座から聴いて動く講座へと成長して行ってほしい。
- ② 現役時代の研究界での経験と退職後の社会に軸足を置いた経験の先に開く新たな研究として「森里海連環の社会実現に関する研究」を深めたい。

(3) 今後の講座への具体的提言

- ① 5年間の成果を地球環境自然学講座編集の「本」として自費出版的に刊行（自ら作り自ら広める）。講座編、自然観察会編。本の普及は私達が深める理念の普及につながることであり、名古屋、関東のシニア自然大学校へもよい影響を及ぼすことを期待している。
- ② 2020 年度講座
環境省「森里川海プロジェクト」10 か所の実証試験地の成果に学ぶ講座と自然観察会
- ③ 2021 年度以降の講座（2026 年度まで）
総合地球環境学研究所 P J とのリンク
「バイオリージョンに立脚した社会の実現と新たな農林漁業体系の構築」（田村典江代表）
研究の成果を聞き、研究フィールドを観察する。

以上の提言への賛同者を募り、下記の委員会を設けその実現に向けて活動することになった。

- 自然学講座記録図書編集委員
- プログラム企画委員

(4) 講演 最終年度自然学講座のねらいー確かな未来の原点を探るー

2019 年度講座のねらいを定めた背景には、混迷を深めるばかりの世界と日本がある。ここから脱却するには「森里海を紡ぎ直し、自然とともに生きる確かな未来を拓く」ことが必要であり、そのためには「原点」を見つめ直し、続く世代の笑顔につながる地域循環共生社会の構築が重要なことと考える。

2015～2019 年度の 5 年間の基本テーマを「森里海のつながりーいのちの循環ー」としたのは、森と海の間を悠久の時を通じていのちの源「水」が巡ることの大切さを問うことであり、自然とともに生きる確かな未来につながる鍵と考えるからである。

詳細はレジュメ p.2 2 項「森里海のつながりーいのちの循環ー」参照。

1) 平成の 30 年は何であったか？

- ① 作家高村薫は「一億総すくみ」の時代と表現。
- ② 膨らむばかりの財政赤字、原発廃炉の負担は次世代、令和の時代は未来世代に責任を持てるか？
- ③ サル化する人間社会（京都大学総長 山極寿一）
- ④ 森は海の恋人運動 30 年

それぞれの項目の具体的内容はレジュメ p.1 (3)、(4) を参照。

2) もう一つの循環：都市と地方を結ぶ

- ① 都市と地方を結ぶ二居住地暮らしの勧め
- ② 都市が地方を支える「霞が関発想」ではなく、地方がないと都市は生きられない現実を直視
養老孟司氏の「現代版参勤交代論」を田中先生自身の体験を交えて説明。

詳細はレジュメ p.2 の 3 項参照

③ 地域循環共生圏

有明海の干潟再生とシニア自然大学校及び柳川の掘割ウナギの郷づくりの現状を紹介された。

3) 確かな未来の原点を探る

- ① 先住民に学ぶ
自然観察会で訪れた次の事例を照会された。内容はレジュメ p.2～3 の 4 項 (1) 参照
 - ・ ニュージーランド・マオリの自然観
 - ・ ウスリータイガに狩猟と漁労に生きる先住民ウデへの暮らしと文化

- ・パラオ共和国の自然と文化

② 人の知恵に学ぶ

- ・魚つき林思想
- ・森は海の恋人
- ・巨大魚つき林（チベット高原を源流とする揚子江、モンゴル高原を源流とするアムール川）
- ・稲作漁労文明の象徴－棚田の思想－
- ・びわ湖のゆりかご水田

以上の紹介あり。内容はレジュメ p.3 の（2）項参照

③ 東日本大震災に学ぶ

気仙沼市小泉海岸、舞根湾、大谷海岸、岩手県大槌町赤浜の防潮堤への取り組み
森は海の恋人植樹祭 30 年→地域になくてはならない年に一度のおまつり

④ 生命文明社会への展望

- ・稲作漁労文明 琵琶湖のゆりかご水田
- ・環境省の説く「環境・生命文明」
モデルとして豊岡市コウノトリの郷づくり
韓国順天市干潟の生態自然公園
- ・第 5 次環境基本計画「環境・生命文明」社会創生
- ・椎葉村・椎葉勝氏「森に暮し海を想い、海に暮し森を思う」

本年度の講座はこのような「つながりの価値観」に根差した社会を復活・新生させるために、
今一度「原点」に戻り、今を見つめ直し、続く世代の幸せにつながる道を探っていく。

以上